

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第20巻 第4号



別 山

写真は白山山頂から撮影したもので、建物がある手前の平らな面は室堂平(標高約2,450m)です。別山の頂上には2等三角点があり、その標高は2,399mです。これまで表紙で紹介してきた御前峰や剣ヶ峰・大汝峰は、全て白山火山の岩石からできていますが、別山は白山火山の活動によってできたものではありません。この山を構成するものは、今から1億数千万年前に湖の底に砂や泥が堆積してできた砂岩や泥岩で、手取統と呼ばれている地層です。かつて湖底で堆積した地層が、現在2,000mをこす標高を有するのは、新しい地質時代における白山地域の隆起活動の大きさを物語るものです。

インドネシア、クタイ国立公園を訪れて



野崎英吉

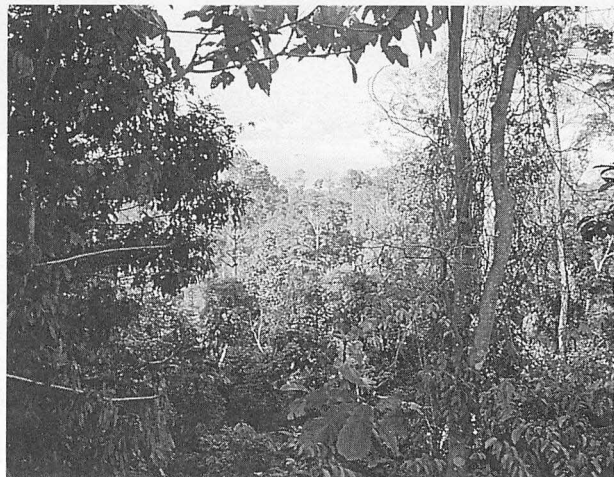
泥濘にはまった自動車と調査隊

1980年代に、三つの大きな森林火災が世界で発生したことをご存じでしょうか。1983年にインドネシア共和国のボルネオ島東カリマンタン州で300万ヘクタールが、1987年には中国の大興安嶺山脈で100万ヘクタールが、翌1988年には北アメリカのロッキー山脈で大面積の森林が灰になりました。

火災後の熱帯降雨林の回復状況ほの研究

私は今回、この内の一つのインドネシア共和国のクタイ国立公園を訪れました。この国立公園はボルネオ島の東海岸に位置し、ちょうど赤道の真下に広がるカリマンタンで唯一の低地熱帯多雨林の残っているところでした。丘陵部のフタバガキ科の森林は、その高さが70mに達する見事なものだったといわれています。ところが、1982年に始まった乾期はエルニーニョ現象の影響下で翌年の1983年5月まで続きました。11カ月間にわたってほとんど雨が降らない異常乾燥の結果、東カリマンタン州からマレーシアのサバ州にかけての310万ヘクタールの森に火災が広がりました。この規模は日本の中国地方ほどの広さの森林が燃えてしまったことに相当します。インドネシアの東カリマンタン州はいわゆる南洋木材の大規模な産地の一つで、今でもコンパネと呼ばれる合板製品に加工されて日本やヨーロッパ、オーストラリアやアメリカに輸出されています。けれどもクタイ国立公園の中には伐りだした木を運ぶための自動車道路や大きな川が無かったために、海岸線の一部を除いて伐採がなく、また東カリマンタンの中で早くから森林保護区として保護されていたこともあって、低地性の熱帯多雨林が残っていたところでした。

地球環境の保全が叫ばれている中、このような大規模な火災跡地が今後どのように回復していくかは研究者の間で重要かつ興味深い大きな研究課題として取り上げられました。その主なものは森林の焼



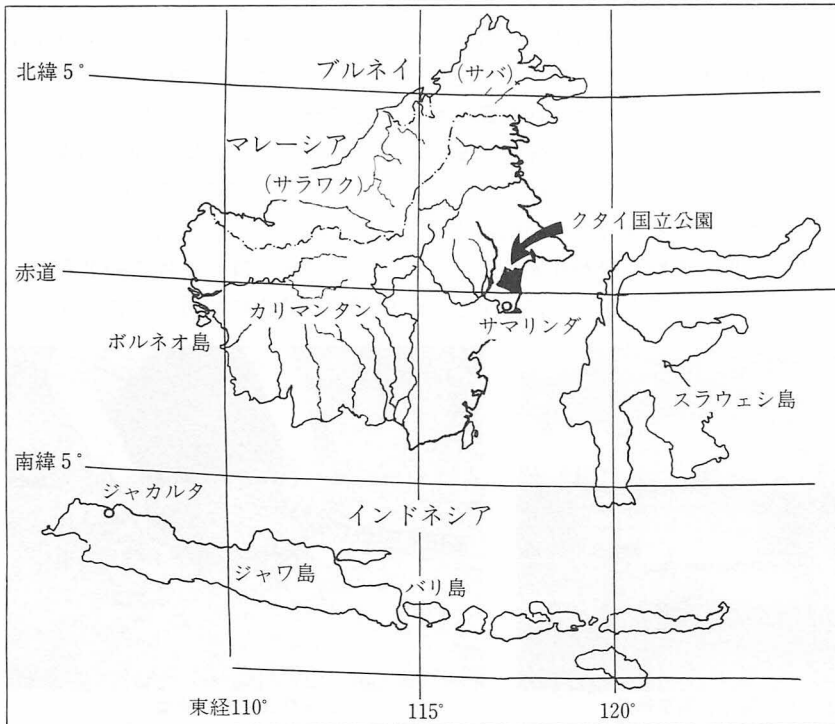
熱帯多雨林

失と枯死に伴う土壌の侵食、植被の回復、動物相の回復でした。この地で長い間調査に携わっていたインドネシア、ハサヌディン大学の生態学者ネンガ・ウィラワン博士から、クタイ地域が火災に遭う前から東カリマンタンでサル類の調査をしていた京都大学の霊長類研究所の東滋助教授に、森林回復に関する共同研究の話が持ち込まれたのは火災後の1984年です。その後、森林の変化を研究されている田川日出夫教授のいる鹿児島大学と共同で、1986年には文部省の国際学術研究で第一次調査が実施されることになりました。この調査では、土壌侵食、森林破壊の状況把握、森林破壊にともなう動物相の変化について調査されました。

今回の調査はそういった意味で、第一次調査から5年を経た森林回復の現状を調べるための第二次調査にあたり、平成3年度と4年度にわたって調査されることになりました。私の担当は、森林が回復する過程で果実食の哺乳類がどのような役割を果たしているかを調べることでした。そのため、手始めにもっともありふれた哺乳類で、捕獲も簡単なジャワジャコウネコを対象にすることにしました。

現地調査行—熱帯の自然の中で

クタイ国立公園は東カリマンタン州の州都サマリングの北方約100キロの所にあります。大量の荷物と我々を満載した2台の車は、朝早くサマリングを出発し、昼にはボンタンに着きました。国立公園の入口の町ボンタンにクタイ国立公園の管理事務所があり、ここで入園の手続きをします。ボンタンから国立公園の北端の町スングタまで公園の東側を真北に道路が通っています。ボンタンまでの道は舗装されてはいるのですが、この道は1年前に作られたばかりで、未舗装の凸凹道です。日本でいえば工事中といったような整備状況です。平坦な道でも雨が降ると泥沼と化す程ですから、4車線ほどもある道幅も車の通れる幅はなく、後はドライバーの経験と技術を頼りにする他はないといったところです。3



時頃国立公園の入り口にきたとき、川に架かっている橋が落ちて、今日中には復旧しないとのことだったのですが、何とか仮設の橋を渡ることができました。しかし、道の方は、前日までに降った雨でかなりのぬかるみが出来ていました。ぬかるみで大きな荷物を乗せたトラックが動けなくなっている横を通り抜けながら、それでもなんとか私たちの車は走り続けました。午後7時前後だったでしょうか、とうとう車が動けなくなりました。天気の良い日には3時間で行かれるところを一晩車と共に世を明かすことになりました。これがクタイ国立公園での初めての夜ということになりました。翌朝、まわりの森からは熱帯の鳥に特有な旋律のある澄んだ歌声の数々とテナガザルのよく通る「ワウ、ワウ、ワウ、・・・、・・・」という鳴き声が森の中に響きわたりました。ぬかるみの道を、足を取られながら裸足で歩くと、あちこちの泥の中には昨夜ここを歩いた動物たちの足跡がくっきりついていました。ここはもう調査対象地の一部です。まっすぐに伸びた背の高い樹木の森とそこから聞こえてくる鳥やテナガザルの声、道の脇を流れる泥水でこびりついた顔や手の泥をを洗っていると、とうとうカリマンタンへやってきたという実感が湧いてきました。

動物班は、海の近くのトゥルクカバにある国立公園のゲストハウスを基地にして調査を開始することになりました。2カ月間という短い滞在期間なので、出来るだけ早く仕事に取り掛かることになり、ここに着いた次の日から罠の設置が始まりました。罠の数は6台、魚や鶏の骨を餌にして、道路沿いのしげみに約200mおきにしかけられました。運よく次の日には雌のジャワジャコウネコが掛かりました。折しもこの日は1993年の正月元旦でした。調査隊一同、年頭に捕獲できた幸先の良さにとても喜びました。

ジャワジャコウネコはマレー半島、スマトラ島、ボルネオ島、スワウエン島とその近隣の島に分布する普通種で、日本にいるハクビシンと同じジャコウネコの仲間です。森の中のキャンプのごみ捨て場や山の近くの集落に出てきて餌をあさることでよく知られています。捕まえたジャワジャコウネコに麻酔し、体のサイズを計った後、発信機を取り付けて放しました。この日から追跡と罠の見回り、そして測量の仕事が始まりました。ここインドネシアには日本のように2万5千分の1や5万分の1といった大縮尺の地図がありません。そのため、調査地の地図作りから初めなくてはいけないのです。すでにある道路は簡単に測量できるのですが、それ以外は、観察路作りをかねて林の中を刈り払い、そのあとで測量しました。これは我々だけでは大変な作業なので、地元の国立公園の職員の人にも手伝ってもらいました。日中は日差しが厳しく、気温は32-33度にまで上がるので、仕事は午前中か午後3時以降のできるだけ涼しい間にすることにしました。2頭目のジャワジャコウネコは1月3日に雄の成獣が掛かりました。しかし、その後しばらくはこの2頭だけだったので罠の位置を大きくずらすことにしました。現地での調査終了時までには雄2頭



調査地にある国立公園事務所



ジャワジャコウネコ

と、雌3頭、そしてチビオマンガースの雄1頭に発信機の装着ができました。現在取りまとめ中ですが、広いもので約1平方キロの行動圏でした。今年の8月から2年目の調査に入りますが、この調査では一日の行動パターン、植物種子の分散がどの様に行われるかなどについても調査する予定です。

クタイ国立公園の現況と問題点

最後にクタイ国立公園の主な動植物と問題点について書き留めて置きましょう。植物では、フタバガキ科の林やボルネオテツボクの大木が見られました。鳥類で最も目立つものでは、現地でトウカンと呼ばれるサイチョウです。翼開長約2mの大きな黒い鳥で、頭の上にオレンジ色の角がついています。飛ぶとその羽ばたきの音が遠くから聞こえるのですぐに見つかります。そのほか、海の近くではコハゲコウ、ハクトウワシを思わせるようなシロガシラトビ、林の中では多くのハト類、ハチクイ類、尾羽の先に長いラケットを着けたような尾のついたオオヒメカザリオウチョウなどの鳥類がいました。哺乳類で観察できたのはオランウータン、ボルネオギボン、テングザル、カニクイザル、小型のマメジカ、中型のシカホエジカ、サンバージカ、イノシシ、キエリテン、ハクビシン、コウモリ類、リス類です。動物の痕跡では、ウンピョウの足跡、マレーグマの爪痕が見られました。

1986年に出来たばかりのクタイ国立公園には、60人の国立公園職員、8つのレインジャーステーション、これらを結ぶ無線システムなどがあります。けれども国家予算が少ないために、公園内の船や道路の交通整備、観察路や案内標識整備、ビジターセンター、自然保護や動植物に関して訓練された職員などまだまだこれから備える必要のあるものばかりです。いま、最も懸念されている問題は、クタイ国立公園内とその周辺には大量の石炭、石油、天然ガスなどのエネルギー資源が埋蔵されているために、この自然を現在のままで保持できるかどうかです。エネルギー資源を輸出して外貨を稼ぐことはインドネシアの国家施策として最重要課題の一つでもあります。現在、国立公園の境までは確実に、また一部では公園内にも開発の手が伸びています。クタイは多くの問題を抱えながらも、動植物に満ちあふれた赤道直下の国立公園として将来が楽しみなところです。

〈白山自然保護センター〉



オランウータン

白山地域にみられる 二重山稜と沼

國光正宏

白山山系は、手取川水系や庄川水系の河川によって深く侵食されたけわしい地形が発達しています。河川沿いはV字谷地形で、大規模な崩壊地形もいくつか見られます。しかし、その山頂部や稜線部には緩やかな地形や平坦面が見られます。この緩やかな地形や平坦面のうち、標高2400m以上の白山山頂一帯のものは、白山火山の噴出物によってつくられたものです。白山火山の噴出物は、古いものでも今から十数万年前のもので、多くはここ数万年前に噴出したものです。山の歴史では、つい最近に堆積したものと いえます。そのため、白山火山の噴出物が分布しているところには、もともとの地形が多く残され、他に比べて緩やかな地形面が残されています。

一方、白山の周辺地域にも、広くはありませんが、比較的緩やかな地形面が見られます。たとえば岐阜県側では、庄川東方の御前岳や猿ヶ馬場山の周辺、白水湖の南東の山稜などです。これらの山頂や稜線はほぼ同じ標高（約2000～1800m）を有することから、河川によって深く侵食される以前にはほぼ同じ地形面をなし、それらが侵食作用の後も取り残されたものといわれています。

二重山稜と呼ばれている地形は、白水湖の南東の山稜で確認されました。二重山稜はこ

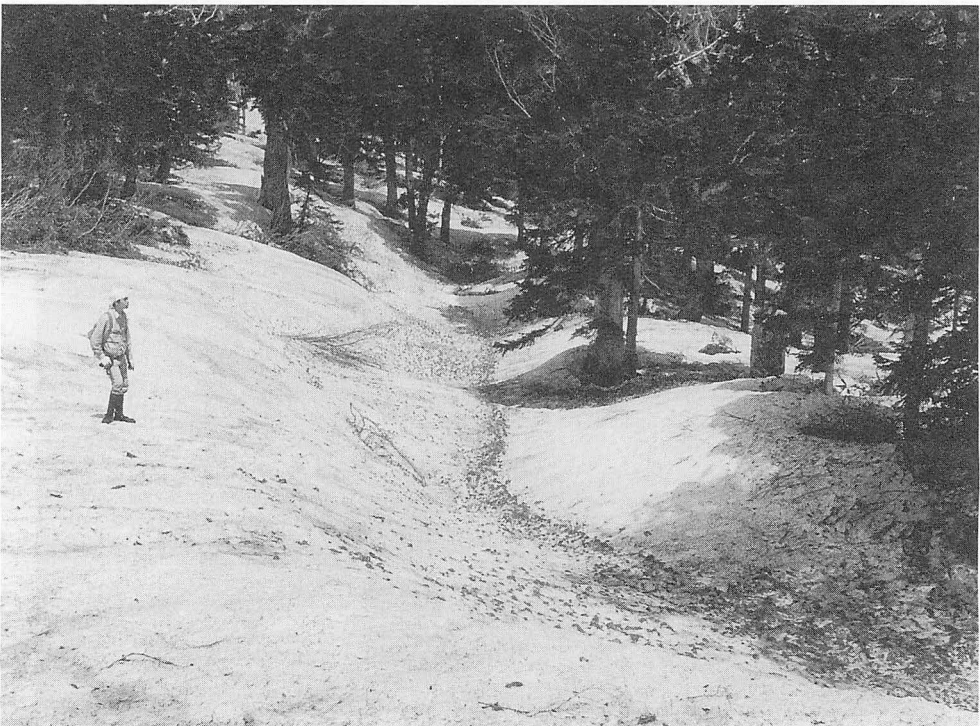


写真1 二重山稜でみられる線状凹地

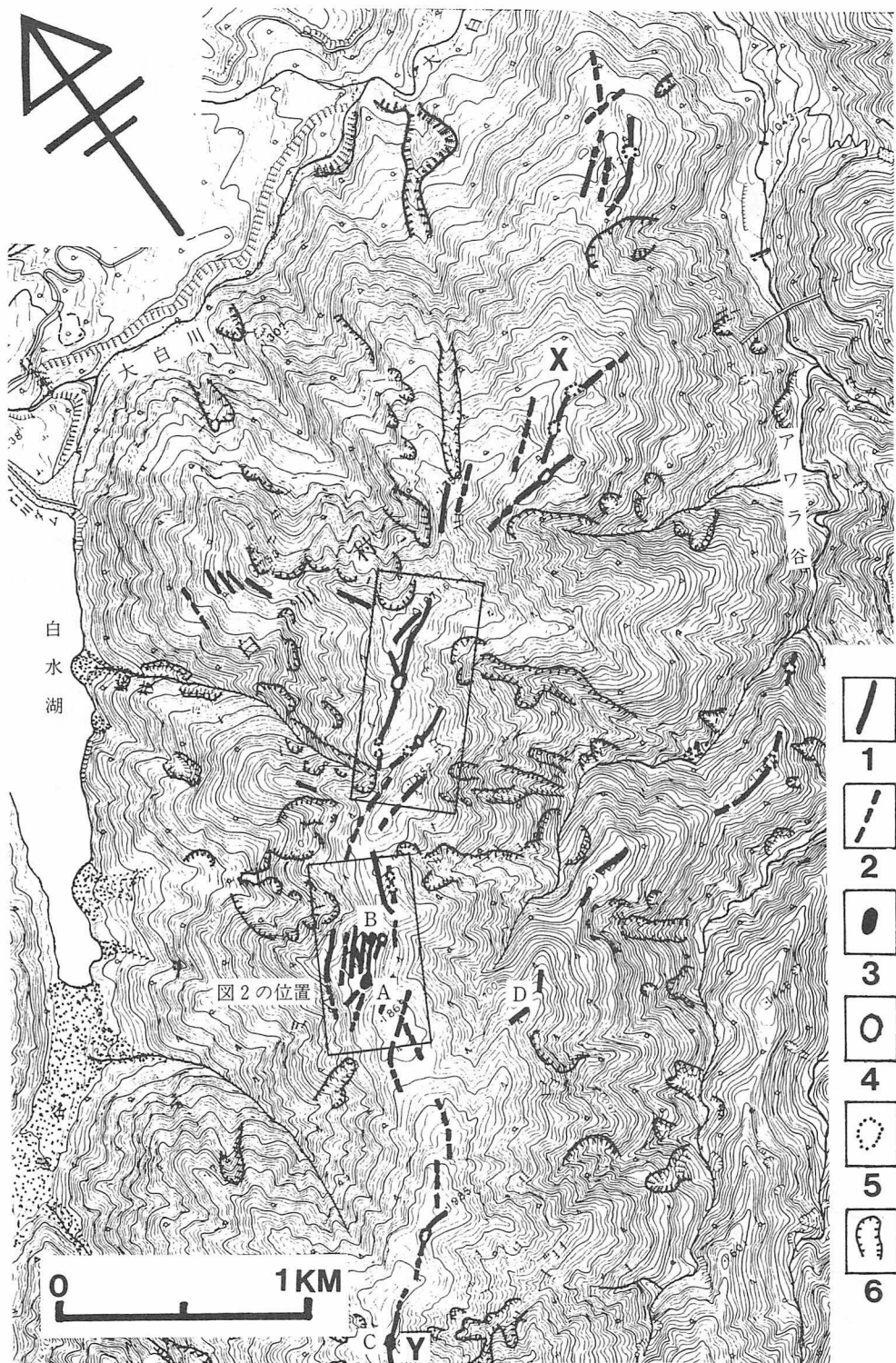


図1 二重山稜と沼・窪地の分布図

1：二重山稜、2：推定した二重山稜、3：沼、4：窪地、5：推定した窪地、6：崩壊地

れまで、中部地方の日本アルプスや東北地方の脊梁山脈などに分布するのが知られていますが、白山地域からの報告はありませんでした。二重山稜は規模の小さな地形ですが、特異な地形です。今回、白山地域で確認された二重山稜を紹介し、そのでき方についても解説したいと思います。

二重山稜とは

山の峰と峰をつないだ峰すじを山稜といい、峰と峰とを結んだ線を稜線といいます。普通は、稜線から両側に向かって標高は単調に減少しますが、時にその稜線付近に細長い凹地（線状凹地）ができ、稜線が2列に分かれていることがあります。そのような地形を、二重山稜と呼びます。このような地形は、稜線の幅が広くてその両側に急な斜面をもつ山地において、しばしば見られる地形です。

今回、鹿野勘次、杉山政広と私が調査して、二重山稜を確認したのは庄川水系大白川の最上流部にあたる地点で、岐阜県白川村地内です(図1、2)。そのあたりの地形は比高約600m以上のV字谷になっており、山頂部の稜線には緩やかな地形面や平坦面が多く見られます。そして、この緩やかな地形の一部に二重山稜が見られます。稜線部は、最も標高が高いところで2083mで、森林限界を超えていません。そのため、二重山稜のような小規模な地形を発見するのは容易ではなく、現地調査や国土地理院撮影の2万分の1の空中写真、岐阜県森林整備課の5000分の1の森林基本図などを併用して二重山稜を確認しました。図1は、今回の調査で確認された二重山稜を示したものです。実線で示した二重山稜は、現地調査で明らかに二重山稜と確認されたものです、破線で示した二重山稜は、空中写真と地形図から推定したものです。

二重山稜は、ほとんどが長さ数百m前後で、短いものでは数m、長いものでおよそ800m

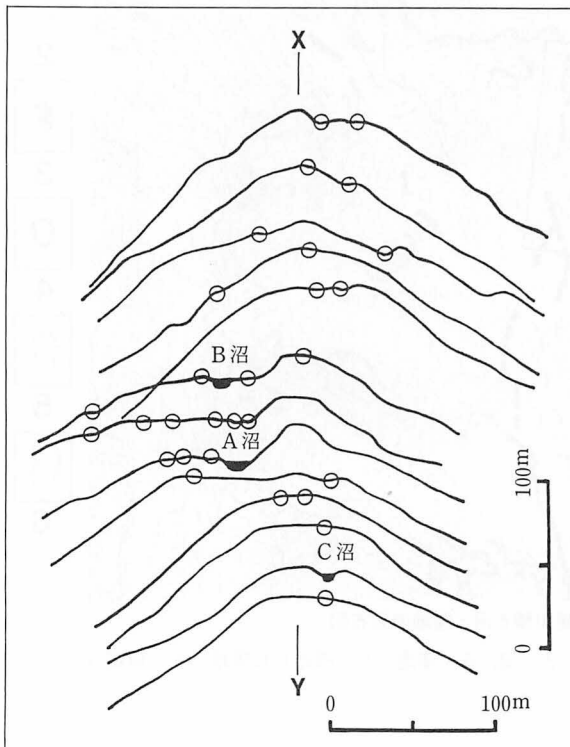


図2 稜線部の地形断面図と二重山稜の位置図
○印が二重山稜、図1のX-Yの稜線と直交する地形断面図を、主稜線の位置で並べたもの。

ほどあります。二重山稜は主に主稜線に発達しますが、時に主稜線から少し外れた場所にも見られ、それらが平行に発達していることがあります。その場合には、多重山稜と呼びます。

二重山稜の稜線と稜線との間には、細長い直線状でほぼ水平な溝（線状凹地）があります（写真1）。溝から山稜までの高さの差は、普通は数m以下ですが、10mに達するところもあります。また、比較的長い二重山稜のある所では、その溝のところどころで窪地や沼になっています（図3・写真2）。沼の一つは縦77m、横45mあり、水の無い部分も含んだへこみ具合は5mにもなります（写真2）。

二重山稜のでき方

このような二重山稜のできかたとして、まず、考えつくのが河川の侵食です。山稜に囲まれて細長く伸びた凹地は、流水の侵食作用を想像させます。しかし、図1から読み取れるように、二重山稜が分布する地形面の高度が一定でなく、二重山稜のおおのの連続性やつながりも特に認められません。また、線状凹地の傾斜が一方向に低くなるものばかりでもありません。さらに、これらの凹地には、流水による堆積物は認められず、白山火山の火山灰などが確認されただけです。これらのことから、細長くのびた凹地は、河川の侵食によるものではないといえます。

また、二重山稜は、堆積岩の地層面でのすべりに起因する正断層という考えもあります。調査地域には、中生代の堆積層である手取層群が露出していますが、二重山稜は必ずしも手取層群の分布地域だけに限られているわけではなく、火成岩地帯にも認められます。また、堆積岩地域にみられる二重山稜でも、山稜の傾斜が地層面と同じ方向に発達していないものもあることから、地層面での滑りに起因する正断層と考えることにも問題があります。

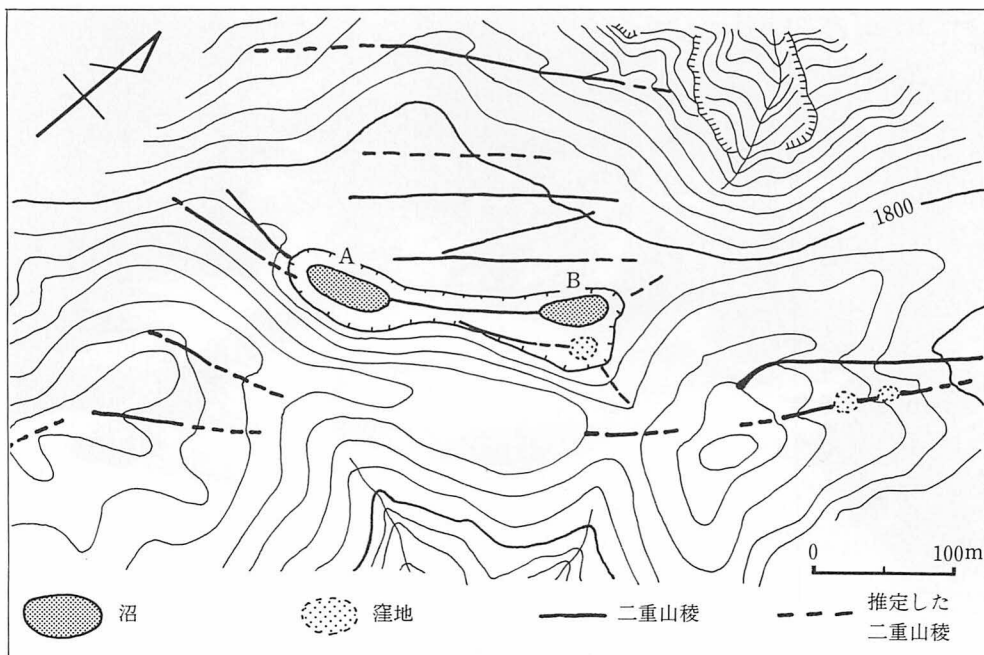


図3 二重山稜に発達する沼と窪地地形
位置は図1を参照

現在のところ、この成因については、場所によって二重山稜の方向と似かよった断層や断層破碎帯が存在することなどから、河川により下部を侵食された山体が、広く重い稜線部を支えることができなくなり、自らの重さで一部が滑り落ちたものと考えられます(図4)。崖崩れの大規模なものと考えたらよいでしょう。

山稜に挟まれた凹地には、沼や窪地が時折認められ、その多くは凹地のほぼ中央に位置します(図1)。これらは、その形態と分布から二重山稜上で発達したものと考えられます。白山地域は、日本でも有数の豪雪地域で、多雪地帯の雪田地形(雪窪)のように多くたまった雪とその雪どけ水がこのような地形の形成を早めたものと思われます。すなわち、沼や窪地は雪の多いこの地域で二重山稜とともに形成されたものと思われます。

二重山稜はいつごろできたのでしょうか

線状凹地は、その形態から堆積物がたまりやすい環境といえます。今回、D地点の線状凹地(図1)で堆積物を調べた結果、図5のような地層が分布していることが分かりました。ここに堆積している火山灰や礫の種類とその堆積の様子から、この堆積物は新白山火山の活動に関係があるものと思われます。新白山火山の活動については、活動の年代とその堆積物の特徴など詳しい研究がされているので、その結果と比較すればその地層のできた時期を推測することができます。つまり、D地点の図5aで見られる安山岩礫は、その産状や下にある尾根の地質が手取層群の堆積岩であることから判断して、ここでこわれてたまった礫ではなく、噴火で飛んできて堆積したものと考えられます。その時期は約1万年以上前のことですが、その時に二重山稜ができていたかどうかは分かりません。図5b-fの地層はその堆積の様子から見て、線状凹地に堆積したものと考えられ、新白山火山の堆積物との比較ができます。中でも図5bとcには、わずかですがアカホヤ火山灰に関係する火山ガラスを含んでいます。このアカホヤ火山灰は今からおよそ6300年前に南九州の



写真2 二重山稜の線状凹地にみられる沼(図2のA沼)

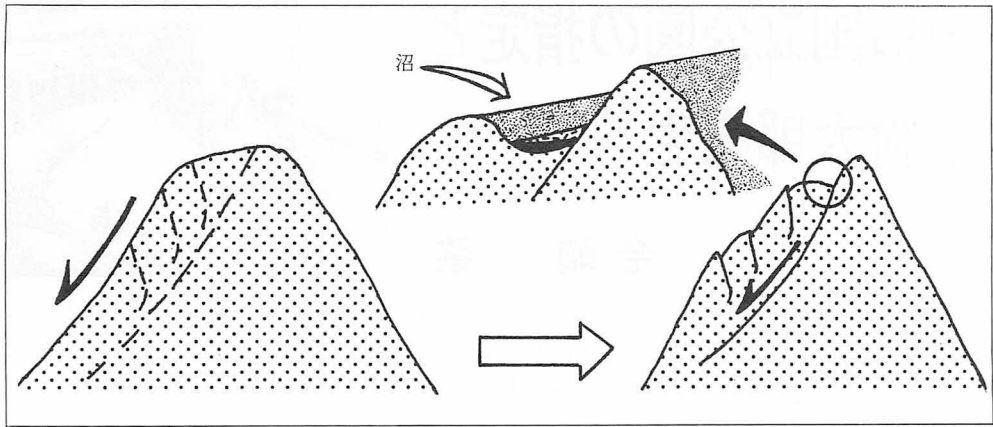


図4 山体崩壊のモデル図

鬼界カルデラの噴火によるもので、バブル・ウォール型火山ガラスが含まれていることが特徴です。

このことから、少なくとも数千年以上前にはすでに二重山稜は存在していたものと思われます。今後、他の二重山稜地域でも堆積物の調査研究を進め、その形成された時代を確かなものとしていく必要があります。

今回、岐阜県の白水湖の南東の稜線部に発達している二重山稜を紹介しました。白山地域の他地域にも、これとよく似た稜線部がいくつか存在します。まだ、確認はされていませんが、そのような地域にも、二重山稜が発達している可能性は高いと思われます。

<岐阜県立博物館>

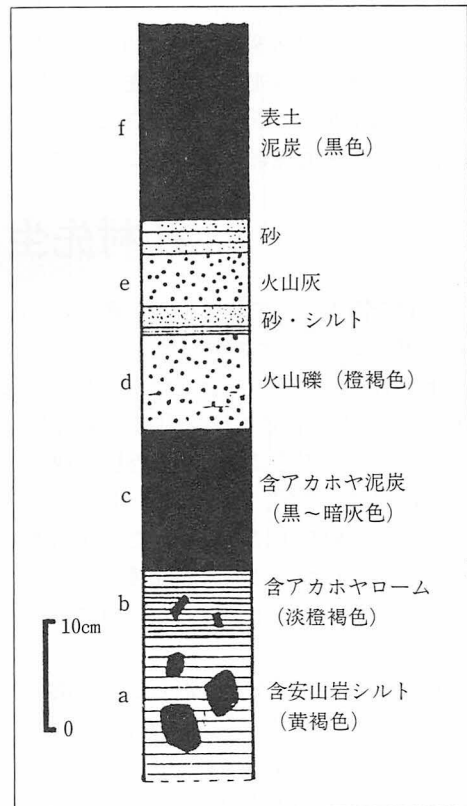
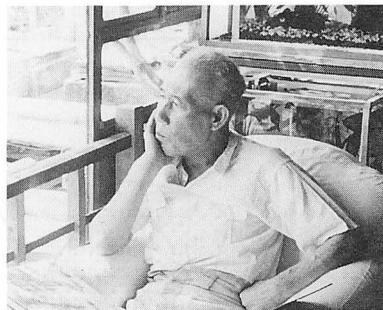


図5 二重山稜の堆積物

図1のD地点、a～fは標本採集の位置

白山国立公園の指定と 辻村太郎先生*



金 崎 肇

昨年は、昭和37年に白山国立公園が指定されてから30周年になるというので、盛大な記念行事が行われた。戦後、自然公園法により厚生省が所管の役所として発足し、戦前迄12カ所あった国立公園を見直したり、区域の変更をしたり、新たに指定を行う仕事が始まった。

地方の行政にとっては、公園の指定を受けると中央から補助金が出るので、早速各地で候補地の名乗りをあげたことは当然である。白山をめぐる指定の運動が始められたことも当然であり、同時に、石川県に於いても指定に向けて白山に関する研究や調査が始められ、白山のユニークさを強調する資料が整えられ出したのも、地方自治体の対応としては当然のことであった。

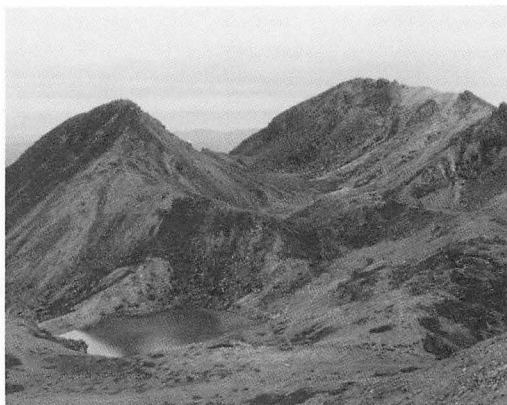
その当時、自然公園審議会の有力メンバーの1人であられた辻村太郎先生は、私の大学時代の恩師であった。文部省所管の天然記念物指定の審議会のメンバーでもあり、先生のお供をして学生時代にも各地の調査や視察に引き廻されたことがある。大学の正規の科目としての実地指導に連れ出されたことも多かった。

卒業して金沢高等師範学校(旧制)の教師となった私は、その後も何かと先生の御指導を受けていたし、前述の白山調査のお手伝いもさせられていた。こんな時、既に国立公園に指定(昭和30年)されていた白山を、国立公園に昇格させる話が持ち上がり、昭和32年に辻村先生が現地視察に来県することになったのである。もちろん、白山登山が目的である。

辻村先生と公園指定

国立公園という名称は自然公園という呼称とともに、「公園といえば兼六園や東京の日比谷公園のようなのが公園」としか思っていなかったわれわれ日本人には余り馴染みのない言葉であった。アメリカで始まった自然保護運動として、前世紀にイエローストーンやヨセミテなどが指定されて国立公園は始まった。わが国では主として外国人観光客を目的に、雲仙、中部山岳、日光、阿蘇などが昭和9年に指定されたのが始まりであり、日本では「自然保護」という考え方が余り一般化していない頃であった。

それが、戦後になるとあちこちで指定を申請する動きが出て、他の行政分野と同じ様に陳情合戦がくり上げられたのである。その頃、辻村先生とお会いした折、この陳情のすさまじさのお話は何回かお



白山

* (1890年～1983年) 神奈川県生まれ。東京帝国大学教授(地理学)

聞きした。先生にとっては、この審議会は居心地の良いものであったようで、あちこちへ招かれた時のことを楽しそうに話された。何しろ、この審議会のメンバーは各界の偉い先生方で、もう定年で大学をやめたような人が多かったし、お呼びする地方自治体関係者などは大変な気の配り様であったようだ。加えて困ったことには、辻村先生は気難しい人で、周囲の人達も大変気を使ったことと思う。

学生の実地指導に出る場合でも、先生が駅へ来られ汽車に乗られる迄は、実施できるかどうかわからない。もし、先生が見えねば中止で、助手の人など、宿泊先へ電報を打って予約を断らねばならない。日頃の授業でも、時間割に何曜日かの1～3時と決まっても、何時に見えるかわからないし、終わるのも、「大分暗くなった。この辺でやめようか」といった調子である。先生は時計や手帳を持たない人だった。良き時代の良き大学だからこそ出来たのであろう。

国立公園指定にむけて——昭和32年の来県

そんなエピソードはいくらでもあるが、昭和32年8月末に先生が白山の実地視察に来県されることになり、私は県からお供をする様に頼まれた時、えらいことになったと先ず直感した。

第一、来県の日程が決まってもいつキャンセルされるかわからないこと、第二に、不愉快なことがあって途中で帰ってしまわれたら地元は大弱りになること、第三は、天気が良いかどうか。登山が好きな先生であるし、自分は野人だと日頃申されていたのであるから山小屋や宿舎の設備の良い悪いは問題ない。しかし、天気が悪いと、山小屋から一步も出ない人なのである。食べ物も野人らしく、山菜でも何でも良い。登山中は食事に味噌汁さえあれば御機嫌なのだから。

県の人や白峰村の役場の人と綿密な打ち合せをし、用意するものは用意し、お土産まで選んだのであるが、天気だけはどうにもならない。結論からいえば、先生が白山に登山された日は好天に恵まれたが、山頂へ着いた翌日からは雨が2日間続いて、先生は山頂付近の外歩きの時間が殆どなく、このことでたいへん機嫌を損ねたのかも知れない。ひょっとして、帰京後の審議会で国立公園指定の結論を出せなかったのは、このときの不機嫌(?)が原因しているのだろうかとも思いたくなる。

先生はあちこち国立公園に申請された所へゆかれています。戦後早い内に国立公園の指定を受けたのは、北海道の支笏洞爺(昭和24年)や東北地方の磐梯朝日(昭和25年)であったが、支笏湖と磐梯山は先生が一度ゆっくり行きたい所(と学生時代からお聞きしていた)だったし、視察旅行を楽しまれたことと思う。白山も、先生はかねがね行きたい所とはお聞きしていた。そして前記の通り登山されることになり来県されたのであるが、この時はすぐには国立公園の指定にはならなかった。白山を独立して国立公園に指定するには少々材料不足であり、中部山岳に編入するにも少し離れ過ぎているというのが理由とされ、国立公園の指定



磐梯朝日国立公園(撮影:平塚吉偉)
「自然への招待」(助国立公園協会(1989)より)

を受ける（昭和37年）までには、もう少し時間がかかった。

辻村先生の登山術

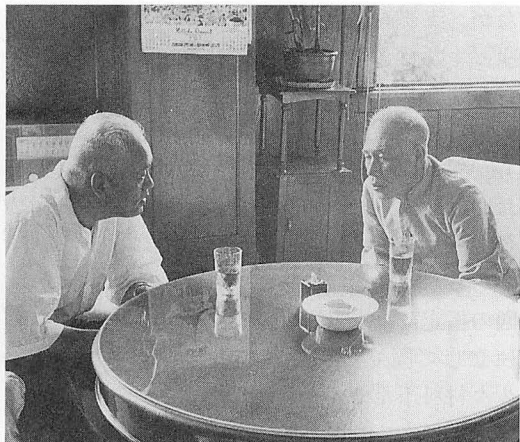
先生は登山が大好きな方であった。先生と一緒に山へ何回も登ったが、先生は汗をかかない程ゆっくりしたペースで登られる。時間など一向に気にしない人であるから。気が向くと、その辺の草むらに腰をすえて地形の講義から、植物相、岩石鉱物の話をされるのは良いが、その昔、文献で読んだこと、他の山のことなど喋り出すと止まらない。加えて、「山へは都会を持ち込むな！」「人より2～3倍ゆっくり登っても、10倍山を楽しむ」という信念を持っておられるので、われわれが登山している時、若い人々が高校野球のラジオを鳴らしながら追い越してゆく様なことがあると、先生は途端に顔色を変えることさえある。又、山小屋での騒ぎも同様であるし、食事も、その辺の山草や野草などが出れば大満足であるが、まずいハムやカレーライスなど出されると、やはり、不愉快な顔をされる、そういった方である。

もう1つ、先生の特技ともいべきことだが、先生は、山小屋の朝食では、大好物の味噌汁さえあれば御機嫌だし、それをお湯で2倍程に薄めて3杯ぐらい飲まれる。いわば飲みだめをされ、途中では一切水を飲まない方である。若い人がジュースを飲むのをみると、たちまち不愉快な顔付をされるし、空缶を目の前でポイと捨てようものなら、大変である。いつだったかその光景に出会って、そこから下山してしまった事さえある。

前記の白山登山をした時は、私がおのそのことを承知しているというので、接待役をお仰せつかったのであろうと思う。いよいよ出発の日、先ず小林副知事（当時）に表敬の御挨拶に出向いたが、ここでも時間かまわず、あちこちの様子をお喋りし出し、秘書課の人をやきもきさせた。白峰村役場のクルマで先ず白山比咩神社へお詣りしたが、ここでも御見せ戴いた宝物類の話がはずんで、時は刻々と過ぎてゆく。

いよいよクルマが動きだしても、途中、お気に召したところがあると、クルマを止め、双眼鏡であちこち眺めながら、今度は私や、同行した玉井敬泉さんなどに講義が始まる。役場の人は、途中で仕入れたイワナが死なぬよう、ガンガン（魚を入れるためのブリキ製容器）の水をかえたり、気が気ではない様子。

もう暗くなって、やっと市ノ瀬の宿舎についた。夕食に出されたイワナの骨酒に先生は大喜びで、大分飲まれた。この分なら、明日の登山の天気さえよければ、そして、お目当ての角閃石（鉱物）の結晶が見つければ、気難しい先生も上機嫌になるだろうと考えていた。所があとがいけなかった。われわれが2階へ上がり寝ようとする頃になると、階下では骨酒が大分廻ったらしく、役場の若い人や村長さんらが、御機嫌になりワアワアやり出したのである。先生は突然、「今から帰る」と起き出したのには私はびっくり。どうやら宴会をお開きにし、翌日は何とか出発することになった。先生の機嫌が直ったのも、朝食に出た味噌汁の味噌が、白峰村の自家製の3年味噌であり、具がヤマアザミだっ



小林副知事（左）と辻村先生（右）

たし、その横には、先生に催促される前に、味噌汁を薄めるためのお湯の入ったヤカンが用意されてあったからかも知れない。

その日は砂防新道をゆっくり登ったが、頂上へ着いた頃から天気は悪くなり、かねがね文献にあったのを御承知だった角閃石の結晶の採集も出来ず、室堂に閉じこめられたまま下山したのである。

帰京後に開かれた次の審議会では、前記の通り白山の国立公園昇格は実現しなかった。先生の持論は「国立公園はスマートな開発をすべき」であり、自然の破壊は最も嫌いなことであった。特に東京で目にかかった折「石川県の方は、私が自然保護を説いたのを勘違いして、『白山は開発しなくても良い。財政上金がかからなくて助かった』と言ったが、とんでもないことで『スマートな開発』といったのは、万人に利用できる方法を講ずることも大切なのだ」と申された。目下、各地で自然が破壊され、濫開発が始まっていた自然公園が多い時、白山のみは、「自然が多く残されている」ことが指定条件の1つであることを踏まえ、今後、上手に利用し、辻村先生のお考えを生かしたユニークな国立公園として存在して欲しいと思う。

(補足) 昭和29年には、辻村先生は文部省所管の天然記念物の指定委員として、岩間噴泉塔の視察に来県された。その時は県教育委員会と尾口村の方々の御案内だったが、私も同道を頼まれた。噴泉塔も白山国立公園の指定の要素の1つであったから、県も熱心であったのは当然である。

その時は三又から発電所の横の旧道をジグザクに登り、出来たばかりの岩間温泉に泊まったのであるが、温泉も食事もお気に入りであった。天気もよし、丁度遊びに来られていた作家の深田久弥さんともバツリお会いした。深田さんは確か一高時代のクラスメートとお聞きしており、ヒマラヤの登山に関する文献の蒐集家として知られる。先生は大喜びだった。先生は気分よく下山されたので、指定は大丈夫と私は思っていた。案の定、「特別天然記念物」の指定の知らせが間もなく県へ届いた。 <元・金沢大学教授>



白山登山中の辻村先生

たより

白山麓は今年も相変わらずの暖冬で、大雪に見舞われた日はほんの数えるほどです。当センターの建物周辺の雪もすっかり解けてしまい、春の訪れが感じられます。尾口村一里野にあるブナオ山観察舎は、3月から4月が一番の見頃です。その頃は、道路上の雪が少なくなるために観察舎まで行き易く、その一方で山地斜面にはまだ雪が残っているので、主な観察対象となるカモシカを発見するのは比較的楽になっています。雪が解けてしまうと、斜面の地肌とカモシカが保護色になって、発見が困難になります。この春は、5月5日まで開館しますので、まだカモシカを見たことのない人は是非一度お越し下さい。

今回の「はくさん」では、当センターの野崎英吉専門研究員のインドネシア調査の一部を報告しました。日本と自然環境の全く違う地域での国立公園の姿を、動物を中心に報告してもらいました。また、岐阜県立博物館の國光正宏氏には白山の稜線部の特殊な地形である「二重山稜」について報告して頂きました。普段あまり馴染みのない地形だけに、観察する機会があれば、本号の記事も参考にして頂けたらと思います。元金沢大学教授の金崎肇氏には、白山国立公園指定「前夜」の頃の裏話を、紹介して頂きました。国立公園のあり方や登山のマナーなどについて考えさせられました。

3月25日(木)には白山地域自然保護懇話会を開催し、「カモシカ保護地域特別調査について」及び「白山夏山登山ピーク時の規制」について当センターより報告されました。

前々号の「はくさん」(第20巻 第2号)の表紙記事の中で、剣ヶ峰の標高を2,684mと書きましたが、実際は2,677mが正しい高さです。この場を借りて訂正させていただきます。
〈岩田〉

目 次

表紙 別山	東野外志男..... 1
インドネシア、クタイ国立公園を訪れて	野崎 英吉..... 2
白山地域にみられる二重山稜と沼	國光 正宏..... 6
白山国立公園の指定と辻村太郎先生	金崎 肇.....12
たより16

はくさん 第20巻 第4号 (通巻86号)

発行日 1993年3月29日
編集発行 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920-23 Tel 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本 確文堂
